

声に出して読む万葉集 第四十三回

旅に棲む伝説歌人 高橋虫麻呂 其の三

卷九 雑歌

一七五三

〔題詞〕 検税使大伴卿が筑波山に登る時の歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 衣手 常陸國 二並 筑波乃山乎 欲見 君来座登 熱尔 汗可伎奈氣 木根取 嘯鳴登 峯上
乎 公尔令見者 男神毛 許賜 女神毛 千羽日給而 時登無 雲居雨零 筑波嶺乎 清照 言借石
國之真保良乎 委曲尔 示賜者 歡登 紐之緒解而 家如 解而曾遊 打靡 春見麻之從者 夏草之
茂者雖在 今日之樂者

〔訓読〕 衣手 常陸の国の 二並ぶ 筑波の山を 見まく欲り 君来ませりと 暑けくに 汗かき嘆げ
木の根取り うそぶき登り 峰の上を 君に見すれば 男神も 許したまひ 女神も ちはひたま
ひて 時となく 雲居雨降る 筑波嶺を さやに照らして いふかりし 国のまほらを つばらか
に 示したまへば 嬉しきと 紐の緒解きて 家のごと 解けてぞ遊ぶ うち靡く 春見ましゆは

夏草の 茂くはあれど 今日の楽しさ

▽語釈

検税使大伴卿 検税使は、諸国に蓄積された正税を検査するために中央から派遣された令外官。
大伴卿は、大伴旅人と考えられている。

衣手 袖を水に浸す意から、地名「常陸」にかかる枕詞。『常陸国風土記』に「常陸」の名前の
由来に、ヒナラスノミコトが泉の水に衣の袖を沾ちて、漬す義によつて、この国の名と為す
とある。

二並ぶ筑波の山 筑波山は男神と女神の高低二つの峰からなる霊山であった。

うそぶき 口をすぼめて息を吹き、音を出す。

ちはひ ちは霊力、ハヒはそれの働く意。威力で助ける。加護する。

時となく ずっとという時を定めずに。ひっきりなしに。

雲居Ⅱ空。

さやⅡ清々しいさま。

いふかりⅡ様子を見たいと思う。

まほらⅡマは接頭語。ホは稲の穂・国の秀などのホ。ラはイヅラ・コチラのラで、漠然と場所を示す接尾語。すぐれた所。

つばらかにⅡまんべんなく。くまなく。

うちなびくⅡ草木の枝葉がもえ出、伸びて靡き繁るので「春」にかかる枕詞。

見ましゆⅡユは比較の基準を示す。：よりは。

夏草のⅡ「しげく」にかかる枕詞。

一七五四 反歌

〔原文〕 今日尔 何如将及 筑波嶺 昔人之 将来其日毛

〔訓読〕 今日けふの日にいかにかしかむ筑波嶺つくはねに昔きの人の来きけむその日も

▼注釈

古来、筑波の山は坂東諸国の男女が、春の花、秋の黄葉を愛でて遊樂する山であつた（『常陸国風土記』筑波郡）

一七五五

〔題詞〕 霍公鳥ほととぎすを詠める一首〔并短歌〕

〔原文〕 鶯之 生卵乃中尔 霍公鳥 獨所生而 己父尔 似而者不鳴 己母尔 似而者不鳴 宇能花乃
開有野邊從 飛翻 来鳴令響 橘之 花乎居令散 終日 雖喧聞吉 幣者將為 遐莫去 吾屋戸之花
橘尔 住度鳥

〔訓読〕 鶯うぐひすの卵かひこの中に 霍公鳥ほととぎす 独うまり生なれて 己なが父なに 似なては鳴なかず 己なが母なに 似なては鳴なか

ず 卵の花の 咲きたる野辺のへゆ 飛び翔かけり 来鳴きなき響とよもし 橘たちばなの 花を居散ゐらし ひねもすに 鳴

けど聞きこきよし 賄まひはせむ 遠とほくな行きそ 我が宿やどの 花橘はなたちばなに 住すみわたれ鳥

一七五六 反歌

〔原文〕 搔霧之 雨零夜乎 霍公鳥 鳴而去成 □ 怜其鳥

〔訓読〕 かき霧^きらし雨の降^よる夜を霍公鳥鳴^{ほととぎす}きて行くなりあはれその鳥

▽語釈

かき霧らし〓カキは接頭語で、一面に…になる意。一面にくもらす。

一七五七

〔題詞〕 筑波山に登りし歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 草枕 客之憂乎 名草漏 事毛有哉跡 筑波嶺^ね尔 登而見者 尾花落 師付之田井尔 鴈泣毛
寒来喧奴 新治乃 鳥羽能淡海毛 秋風尔 白浪立奴 筑波嶺^ね乃 吉久乎見者 長氣尔 念積来之
憂者息沼

〔訓読〕 草枕 旅の憂へを慰もる こともありやと 筑波嶺^{つくはね}に 登りて見れば 尾花散^{をばな}る 師付^{しつく}の

田居^{たゐ}に 雁がねも 寒く来鳴きぬ 新治^{にいばり}の 鳥羽の淡海^{あふみ}も 秋風に 白波立ちぬ 筑波嶺^ねの よけく

を見れば 長き日^けに 思ひ積み来し 憂へはやみぬ

▽語釈

尾花〓ススキの花穂。

師付〓茨城県新治郡千代田町志筑の地。国府のあつた石岡市の西すぐ近く。

田居〓田のある所。田んぼ。

鳥羽の淡海〓茨城県真壁郡明野町から関城町、下妻市にかけての一带にあつた湖。
よけく〓よいこと。

一七五八 反歌

〔原文〕 筑波嶺^ね乃 須蘇廻^{すそみ}乃 田井尔 秋田苧 妹許将遣 黄葉手折奈

〔訓読〕 筑波嶺^ねの裾廻^{すそみ}の田居に秋田刈る妹がり遣^やらむ黄葉手折^{もみちたを}らな

〔題詞〕 筑波嶺に登りて嬬歌會かがひすを為る日に作る歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 鷺住 筑波乃山之裳羽服津乃 其津乃上尔 率而 未通女^ハ壮^ヰ士之 往集 加賀布嬬歌尔
他妻尔 吾毛交牟 吾妻尔 他毛言問 此山乎 牛掃神之 從來 不禁行事叙 今日耳者 目串毛勿
見事毛咎莫〔嬬歌者東俗語曰賀我比〕

〔訓読〕 鷺^{わし}の住む 筑波^{つくは}の山の 裳羽服津^{もはきつ}の その津^{うへ}の上に 率^{あども}ひて 娘子^{をとめを}壮士^{とこ}の 行き集^{つど}ひ かが

ふかがひに 人妻^わに 我^{まじは}も交らむ 我^わが妻に 人も言問^{こと}へ この山を うしはく神の 昔より 禁
めぬわざぞ 今日^{けふ}のみは めぐしもな見そ 事もとがむな〔嬬歌は、東^{あづま}の 俗^{くにひとのことば} 語^かに賀我比^{かがひ}と
曰ふ〕

▽語釈

裳羽服津Ⅱ所在未詳。筑波山周辺の津か。

率Ⅱ声をかけて誘い連れだつ。

かがひⅡカキ（懸）アヒ（合）の約。男女互いに掛け合いで歌を歌う意。

言問Ⅱ（求婚の）言葉をかける。

うしはきⅡウシは主人、ハキは佩く意。（土地などを）主として持っている。領する。

めぐしⅡいたわしい。見るに堪えない。かわいそうだ。

一七六〇 反歌

〔原文〕 男神尔 雲立登 斯具礼零 沾通友 吾将反哉

〔訓読〕 男神^{ひこかみ}に雲立^{のぼ}ち上りしぐれ降り濡れ通るとも我れ帰らめや

〔左注〕 右の件の歌は、高橋連蟲麻呂歌集の中に出づ。

相聞

一七八〇

〔題詞〕 鹿嶋郡かしまのこほりの荻野橋かろのばしにして大伴卿に別れし歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 牡牛乃 三宅之へ瀘^ル 指向 鹿嶋之埼^ル 狹丹塗之 小船儲 玉纏之 小梶繁貫 夕塩之 満
乃登等美^ル 三船子呼 阿騰母比立而 喚立而 三船出者 濱毛勢^ル 後奈へ美^ル 居而 反側 戀香裳
将居 足垂之 泣耳八将哭 海上之 其津乎指而 君之己藝歸者

〔訓読〕 ことひ牛の 三宅の潟^{かた}に さし向ふ 鹿島の崎に さ丹塗^{にぬ}りの 小舟^{をぶね}を設^まけ 玉巻きの

小楫繁貫^{をかしじぬ}き 夕潮^{ゆふしほ}の 満ちのとどみに 御船子^{みふなこ}を 率^{あども}ひたてて 呼びたてて 御船出^{みふねい}でなば 浜も

狭^せに 後^{おく}れ並み居て こいまろび 恋ひかも居らむ 足すりし 音^ねのみや泣かむ 海上^{うなかみ}の その津
を指して 君が漕ぎ行かば

▽語釈

ことひ牛^ニ 〔ことひ〕は、コト（殊）オヒ（負）の約。特に重い荷を背負う牡牛。「ことひ牛」
は、特牛が稻などの貢ぎ物を屯倉に運ぶことから、地名「三宅」にかかる枕詞。

三宅の潟^ニ 千葉県銚子市三宅町の海辺。

差し向かひ^ニ 面と向かう。

鹿島の崎^ニ 茨城県鹿嶋郡の南端、波崎町。

とどみ^ニ トトはタタへ（湛）のタタの母音交替形。一杯に満ちた潮合。

こいまろび^ニ 〔こい〕は倒れて横になる。

海上^ニ 千葉県にあたる上総国にも下総国にも海上郡がるが、鹿島から目指すという場合は後者
（銚子市と現海上郡）であろう。

一七八一 反歌

〔原文〕 海津路乃 名木名六時毛 渡七六 加九多都波 一船出可為八

〔訓読〕 海^ちつ道の なぎなむ時も 渡らなむかく立つ波に 船出すべしや

〔左注〕 右の二首は、高橋連蟲麻呂の歌集の中に出づ。

挽歌

一八〇七

〔題詞〕 勝鹿^{かつしか}の真間^{まま}の娘子^{をとめ}を詠^よみし歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 鶏鳴 吾妻乃國尔 古昔尔 有家留事登 至今 不絶言来 勝壯鹿乃 真間乃手兒奈我 麻衣
尔 青衿著 直佐麻乎 裳者織服而 髮谷母 搔者不梳 履乎谷 不著雖行 錦綾之 中丹褱有 齋兒
毛 妹尔将及哉 望月之 満有面輪二如花 咲而立有者 夏蟲乃 入火之如 水門入尔 船已具如
久 歸香具礼 人乃言時 幾時毛 不生物呼 何為跡歟 身乎田名知而 浪音乃 驟湊之 奥津城尔
妹之臥勢流 遠代尔 有家類事乎 昨日霜 将見我其登毛 所念可聞

〔訓読〕 鶏とりが鳴く 東あづまの国に 古いにしへにありけることと 今までに絶えず言ひける 勝鹿の 真間
の手兒てこな名が 麻衣あさぎぬに 青衿あをくびつ着け ひたさ麻をを 裳もには織り着て 髪かだにも 搔けづきは梳くつらず 沓くつをだ
にはかず行けども 錦綾にしきあやの 中に包める 齋いはひ子も 妹にしかめや 望月もちづきの 足たれる面おもてわに花
のごと 笑みて立てれば 夏虫の 火に入るがごと 港入りに 舟漕ふねぐごとく 行きかぐれ 人の
言ふ時 いくばくも 生けらじものを 何すとか 身をたな知りて 波おとの音の 騒おどく港の 奥城おくつきに
妹いもが臥ふやせる 遠き代に ありけることを 昨日きのふしも 見けむがごとくも 思ほゆるかも

▽語釈

真間 千葉県市川市真間の地。

鶏が鳴く 地名「あづま」にかかる枕詞。東国の言葉が分かりにくく鶏が鳴くように聞こえたか
ら。

手兒名 上代東国方言。ナは愛称の接尾語で、ラの転。少女。

麻衣 麻布で作った着物。粗末な衣。

青衿 青いえり。

ひたさ麻 ヒタはまじりけのない意、サは接頭語。純粋な麻の糸。

齋ひ 将来の幸福を願い、めでたい言葉を述べる。

足れる 「足り」は条件を十分に満たし、過ぎもせず欠けもしない状態にある意。

行きかぐれ 「かぐれ」は寄り集まる意。

たな知り タナはたしかに、しつかりの意。確かにわきまえる。

奥つ城 墓所。墓。

〔訓読〕 勝鹿の真間の井見れば立ち平し水汲ましけむ手児名し思ほゆ

▽語釈

立ち平らしⅡいつもそこに立つて、そのの所を踏んで平らにする。

【参考】葛飾の真間の娘子については、卷三の四三一―三に山部赤人の長歌と反歌がある。

〔題詞〕 勝鹿の真間の娘子の墓を過ぎし時、山部宿祢赤人の作れる歌一首〔并短歌〕

いにしへにありけむ人の倭文幡の帯解き交へて伏屋立て妻問ひしけむ勝鹿の真間のが奥

つ城をこことは聞けど真木の葉や茂くあるらむ松が根や遠く久しき言のみも名のみも我れは
忘らゆましじ（四三二）

我れも見つ人にも告げむ勝鹿の真間の手児名が奥つ城ところ（四三二）

葛飾の真間の入江にうち靡く玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ（四三三）

一八〇九

〔題詞〕 菟原處女の墓を見し歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 葦屋之菟名負處女之八年兒之片生之時從小放尔髪多久麻弓尔並居家尔毛不所見
虚木綿乃牢而座在者見而師香跡悒憤時之垣廬成人之詵時智弩壮士宇奈比壮士乃廬八
燎須酒師競相結婚為家類時者焼大刀乃手穎押祢利白檀弓靱取負而入水火尔毛将入
跡立向競時尔吾妹子之母尔語久倭文手纏賤吾之故大夫之荒争見者雖生應合有哉
穴串呂黄泉尔将待跡隠沼乃下延置而打歎妹之去者血沼壮士其夜夢見取次寸追去祁
礼婆後有菟原壮士伊仰天□於良妣□地牙喫建怒而如己男尔負而者不有跡懸佩之小
劔取佩冬□積都良尋去祁礼婆親射歸集永代尔標将為跡遐代尔語将継常處女墓中尔
造置壮士墓此方彼方二造族共置有故縁聞而雖不知新喪之如毛哭泣鶴鴨

〔訓読〕 葦屋の菟原娘子の八年子の片生ひの時ゆ小放りに髪たくまでに並び居る家にも

見えず虚木綿の隠りて居れば見てしかといぶせむ時の垣ほなす人の問ふ時茅渟壮士
菟原壮士の伏屋焚きすすし競ひ相よばひしける時は焼太刀の手かみ押しねり白真弓

鞆取り負ひて 水に入り 火にも入らむと 立ち向ひ 競ひし時に 我妹子が 母に語らくしつ
たまき いやしき我が故 ますらをの 争ふ見れば 生けりとも 逢ふべくあれやししくしろ
黄泉に待たむと 隠り沼の 下延へ置きて うち嘆き 妹が去ぬれば 茅渟壮士 その夜夢に見
とり続き 追ひ行きければ 後れたる 菟原壮士い 天仰ぎ 叫びおらび 地を踏み きかみたけ
びても ころ男に 負けてはあらじと 懸け佩きの 小太刀取り佩き ところづら 尋め行きけれ
ば 親族どち い行き集ひ 長き代に 標にせむと 遠き代に 語り継ぎがむと 娘子墓 中に造
り置き 壮士墓 このもかのもに 造り置ける 故縁聞きて 知らねども 新喪のごとも 哭泣き
つるかも

▽語釈

菟原Ⅱ和名抄の摂津国に「菟原 宇波良」と見える地。兵庫県芦屋市を中心とした地域。

片生ひⅡ成長・発達の不十分なこと。

小放りⅡフは接頭語。上代の少女の髪型。「うなぬ」（十二、三歳までの子どもの髪で、垂らした髪をうなじにまとめた形）の髪を成人して振分け髪に結い上げたもの。

髪たくⅡタキは髪をかきあげる。

虚木綿のⅡ「隠」にかかる枕詞。かかり方未詳。

いぶせみⅡ「見てしかと」（見たいものだ）心の中で苦しく思う。

垣ほなすⅡ垣をめぐらすような。ひどく噂を立てられるのにいう。

伏屋焚くⅡ「すすし」にかかる枕詞。粗末な家で火をたくと立つ煤ということから。

すすし競ひⅡススはススミ（進）のススと同根。進んで競り合う。

よばひⅡ言い寄る。求婚する。

手かみⅡ剣の柄。

押しねりⅡおさえひねる。

倭文たまきⅡ「いやしき」にかかる枕詞。

逢ふべくⅡ「逢ひ」は結婚する。

ししくしろⅡ肉（しし）を串に刺したうまい味、よい味がするので、同音の「黄泉」にかかる。

隠り沼の〓見えない意で、「下」にかかる枕詞。

下延へ〓シタは人に隠した心、ハエは延び広がせる意。人知れず思いを抱く。

菟原壮士い〓イは主格の下につく補格の助詞で、強意を示す。

きかみ「牙噛み」〓齒ざしりする。

もころ男〓自分と同じような男。自分の相手となる男。

かけはき〓「かけ」はひっかけてさげる。「はき」は、太刀を身につける。

ところづら〓トコロ芋の蔓。葉のあるうちに見当を付けておき、冬に蔓をたどって掘り出すことから「尋め行く」にかかる枕詞。

このもかのも〓こちら側とあちら側と。

一八一〇 反歌

〔原文〕 葦屋之 宇奈比處女之 奥柳乎 往来跡見者 哭耳之所泣

〔訓読〕 芦屋あしのやの菟原娘子の奥城おくつきを行き来と見れば哭ねのみし泣かゆ

一八一

〔原文〕 墓上之 木枝靡有 如聞 陳努壮士尔之 依家良信母

〔訓読〕 墓うへの上の木の枝靡えなびけり聞きしごと茅渟壮士にし寄りにけらしも

▽語釈

けらし〓回想の助動詞ケリの連体形ケルに推量の助動詞ラシのついたケルラシの約。過去の推量を表す。：：たらしい。

〔左注〕 右の五首は高橋連蟲麻呂の歌集の中に出づ。

【参考】 一八〇一～三に、田辺福麻呂が菟原娘子の墓を見て詠んだ歌がある。

〔題詞〕 葦屋處女の墓を過ぎし時、作れる歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 古之 益荒丁子 各競 妻問為祁牟 葦屋乃 菟名日處女乃 奥城矣 吾立見者 永世乃 語尔為乍 後人 偲
尔世武等 玉梓乃 道邊近 磐構 作冢矣 天雲乃 退部乃限 此道矣 去人每 行因 射立嘆日 或人者 啼尔毛
哭乍 語嗣 偲繼来 處女等賀 奥城所 吾并 見者悲喪 古思者

〔訓読〕 古の いにしへ ますら壮士の をとし 相競ひ 妻問ひしけむ 葦屋の あひきは 菟原娘子の うなひをとめ 奥城を おくつき 我が立ち見れば 長き世の
語りにしつゝ 後人の のちひと 偲ひにせむと 玉梓の たまほこ 道の辺近く 岩構へ いはかま 造れる塚を あまくも 天雲の そくへ 極み きは この
道を行く人ごとに行き寄りて い立ち嘆かひある人は ね 哭にも泣きつゝ 語り継ぎ 偲ひ継ぎくる 娘子

らが 奥城処 おくつきいり 我れさへに見れば悲しも 古思へば いにしへ

▽語釈

そくへ＝遠く離れたところ。

〔原文〕 古乃 小竹田丁子乃 妻問石 菟會處女乃 奥城叙此

〔訓読〕 古の しのだをとし 信太壮士の妻問ひし 菟原娘子の奥城ぞこれ

▽語釈

信太＝大阪府和泉市信太の地。

〔原文〕 語繼 可良仁文幾許 戀布矣 直目尔見兼 古丁子

〔訓読〕 語り継ぐからにも ただめ ここだ恋しきを直目に見けむ 古壮士 いにしへやい

▽語釈

ここだ＝こんなにはなはだしく。